

1. はじめに

本発表では、現代日本語における「というか」とその変化形「ていうか」「てか」「つか」など(以下ではまとめて「トイウカ」とする)の用法のうち、談話標識として用いられている「トイウカ」に着目し、その機能を再考する。そして、もともとの形式である「というか」と、そのバリエーションである「てか」「つか」の用法の違いについて、文法化という側面から考察する。

本発表では、談話標識(Discourse Marker)を、「談話中のある部分を、その先行及び後続部から切り離し、一つの単位としてまとめる役割を担うもの(Schiffrin, 1987)」であり、「(発話中や発話末に現れるものもあるが)主に発話の頭で用いられ、談話レベルで機能し、話し手・聞き手の何らかの発話意図を合図する独自の談話機能を備えている(廣瀬, 2014)」ものであるとする。以下では、まず、「トイウカ」の機能について、網羅的に考察したものや、談話標識としての機能について述べた先行研究についてまとめたのち、改めて「トイウカ」の持つ機能とその用法について考察する。そして、「トイウカ」の機能の変化について、文法化という側面から考察する。

2. 「トイウカ」の機能についての先行研究

談話標識としての「トイウカ」群についての先行研究は、以下のようなものが挙げられる。吉澤(2003)では、「というか」のバリエーションである「っていうか」を談話標識として扱い、その機能を分析している。吉澤(2003)では、談話標識としての「っていうか」の持つ機能を、①前の発話内容の微調整、②挿入、③話題の転換、④話し手の志向を示す、の4つに分類している。そして、談話標識としての「っていうか」が、自分の思考と自分自身の発する言葉の間とのずれを埋め、対人関係を緩衝し、若者が抱く不安や恐れを解消する効果があると指摘している(吉澤, 2003)。また、日常会話における「というか」の使用全体を考察した沖(1999)、寺井(2000)、原田(2015)では、「というか」に「発話を修正する用法」と「何の脈絡もなく話題を転換する用法」があるとし、それぞれを〈発言改正用法〉〈話題調整用法〉と呼んでいる(名称は原田(2015)に拠る)。また、会話分析的な視点から「トイウカ」を考察したものには、次のようなものが挙げられる。若松・細田(2003)は、「というか」のバリエーションのひとつである「ていうか」が予測可能性¹を持つという特徴があるとし、予測可能性に即した基本的な用法を〈修復マーカー〉とし、予測可能性を裏切る用法を〈転覆的用法〉としている。次に、Laury and Okamoto(2011)は、修復を行う「ていうか」と英語の“I mean”を比較しながら考察し、両者は先行発話が内容や表現の面で不足していることを表し、メタ言語的機能を持つという点で共通していると論じている。

3. 談話標識としての「トイウカ」の機能再考

談話標識としての働きをする「トイウカ」についての先行研究には以上のようなものがあるが、これらは発話における「トイウカ」の機能をすべて体系的に説明しようとするものであり、また、「トイウカ」の個々の事例に着目し、それらを網羅的に記述することを試みるものであった。しかし、コーパスで見られた「というか」の使用例を見ると、「というか」の持つ機能はどれか一つに決められるとは限らず、非常に曖昧なも

¹ 予測可能性とは、「相互行為においてターンがいつ、どのように構成されていくのかについて、参加者がおおまかに予測していくこと」である(若松・細田, 2013)。

のであると考えられる。先行研究において「トイウカ」の機能とされているものは、その使用されている「場面」の分類であり、根本的な機能とは言いにくい。以下は、実際の「トイウカ」の使用例である。

(1) 01:F107: 夕ご飯食べに行く？

02:F107: 一緒に。

03:F107: でもさあ、何するということだけど。

04:F107: というか、ちょっととんで、でも昼からじゃああんまり遠出もできないね。

05:unknown: (うーん)

06:F128: まあでも、多少。

07:F107: どっか行けそうなところあるかな。(名大会話コーパス。下線は筆者による、以下同様。)

この例では、「というか」を用いて新しい話題(「昼からでは遠出はできない」という自分の意見)を述べているようにも見えるが、01~03行目でF107が「夕ご飯を食べに行こう」と誘った発話に対する自己修復ともとれる。このように、「トイウカ」の果たす機能がどちらともとれるような曖昧なデータが多く存在する。次の(2)も、機能が曖昧な例である。

(2) NaoとYuiは、香水について話している。ギョームは香水のメーカー名。

01:Nao: けっこう、鼻利かしちゃうよ、わたし、初対面とか。

02:Yui: でも、そうだよ、それもそうよね。わたしにもつけてないから、なんでつけてないのとかって言われるもん。

03:Nao: う：ん(.) うん。っていうかさあ、OLのころはわたしも ず：：：と、ギョームだったのね。(若松・細田(2003), 例(5), p38)

若松・細田(2003)では、(2)を、「ていうか」を用いて自分に関する全く新しい話題を導入し、相手の予測を裏切って相互行為の流れを転覆させる〈転覆的用法〉としている。しかし、この例においても、「香水」という前文脈があってこそ「ていうか」で自分の話を導入できるわけであり、全く新しい話を導入しているわけではないと考える。原田(2015)では、〈話題調整用法〉を、〈話題導入〉と〈話題維持〉の二つに分類しているが、それらも、どちらともとれる例が多くあり、そもそも「話題」の定義がはっきりしていないという点が指摘される。

以上を踏まえ、本発表では、廣瀬(2014)の談話標識に対する考えに基づき、「ていうか」の持つ複数の用法を、連続性を持つものとして捉え、談話標識としての「トイウカ」群を、「AトイウカB」という構文との連続体として考察する。すなわち、もともとは発話中の「AトイウカB」という構文で修復マーカ(若松・細田, 2003)として用いられていた「トイウカ」が、発話頭でも用いられるようになり、単に発話を修正する機能から、その修正する内容(AとB)が同一範疇に留まらないようになり、談話標識として機能するようになったと考える。ゆえに、「トイウカ」の機能はどれか一つに決定できるものではなく、「修復マーカ」と「談話標識」の二極の間に、段階性をもって存在すると考える。²以下では、「トイウカ」の持つ根本的な機能について考察したのち、「トイウカ」が複数の機能を持つことについて、Shinzato(2017, 2018)の文法化についての考察から考える。

4. トイウカ」の持つ根本的な機能：文法化の側面から

² 吉澤(2003)では、文中で発話を修正するものも談話標識として扱われているが、本発表では、それらは談話標識ではなく、修正マーカ(若松・細田(2003)では修復マーカ)として扱う。

廣瀬(2013)では、複数の意味が存在するある言語標識の全体像を考える場合、共通するコアの意味がある
と考える単一意味的アプローチをとることの有用性を考察している。本稿では、「トイウカ」に対してこの単
一意味的アプローチをとり、その共通するコアの意味を、Laury and Okamoto (2011) で指摘されている『不
足感』であるとする。ここで、その不足感が、発話内容ではなく発話状況に対して不足感がある場合、発
話している現場の文脈を調整しようとする談話標識としての働きを果たすと考える。

本発表では、連続体としての「トイウカ」を考察する際に、Shinzato(2017)の文法化に対する考察を援用
する。Shinzato(2018)では、日本語において、ある言語表現が中心部から左辺部への位置移動した結果、
DM(Discourse Marker)として機能するようになった例を、接続詞や漢語名詞の例から考察している。DM と
は、「主に文頭で使用され、文同士の結束性をマークし、接続詞的な働きをするもの(Shinzato, 2018)」であ
る。さらに、ある言語表現が中心部から右辺部へ移動した結果、MM(Modal Marker)として機能するよう
になった例を、並列接続詞や日本語形式名詞などの例から考察している。MM とは、「命題や聞き手に対する話
し手の態度を文末においてマークする(Shinzato, 2018)」ものである。

これを、日本語の「トイウカ」で考えると、以下のようにになると考えられる。即ち、もともとは「A という
か B」という構文で、文の中心部にあったものが、文法化によって発話頭、発話末で用いられるようになっ
たということである。本稿では、文中で用いられ、発話を修正する「トイウカ」の用法を①〈発話修正用法〉
とする。そして、文頭で用いられ、先行研究で〈話題調整用法〉〈転覆的用法〉として扱われている用法を、
DM として働く②〈文脈調整用法〉とする³。そして、①と②は、独立して存在するものではなく、連続し、
段階性をもったものとして考える。①、②に共通するものは、上述した『不足感』であり、個々の用法は、
「トイウカ」が実際に使用されている場面で結果的に決まるものであると考える。

さらに、田辺(2008, 2013)では、「トイウカ」の文法化に伴う音韻的变化と、その機能の変化について考察
している。田辺(2008)では、「トイウカ」には母音の変化と子音の変化の二つが存在し、最終的な母音の変化
は、①【oiu→e】と②【oiu→u】の二つであり、子音の変化は③【tの破擦音化】と④【子音重複】の二つで
あると指摘している。さらに、田辺(2008)では、「トイウカ」における文法化の過程を四段階に分け、それぞ
れで用いられる「トイウカ」のバリエーションに偏りがあると指摘している。その四段階とは、【第一段階：
複合助詞表現「というか】、【第二段階：従属表現「ていうか」「ってか」「つうか】、【第三段階：会話指標
「つーか」「ってか】、【第四段階：フィラー、呼びかけ語的意味「つーか」「つか」「てか】である。このよ
うに、田辺(2008)では、「トイウカ」が、文法化により主観化が進んだ結果、文中ですでに自分で述べたこと
に対して、若干の譲歩的内容を加えたりする談話的機能を獲得したと説明している。

また、原田(2015)においても、「トイウカ」群における音韻的变化を伴ったバリエーションを「ト形」と「テ
形」、「ツ形」に分け、それぞれが用いられる用法に偏りがあると考察している。原田(2015)では、「テ形」・
「ツ形」のほうが文脈調整(原田(2015)の用語では「発話調整」)で使われる率が高いことが、得られたデータ
をもとに指摘されている。即ち、音韻的变化を伴い「というか」の文法化が進んだ結果である「テ形・ツ形」
は、その機能において、文法化が進んだ結果である談話標識の使用が多くなるという制約が加わっている
ということである。本発表では、「トイウカ」の文法化に伴う使用の制約において、親疎関係も挙げられると考
える。以下の例では、「てか」や「つーか」は使用しにくい。

(3)教師：来週の発表の進捗はどうですか。

学生：つーか先生、発表が来週なんて聞いていませんよ。

(筆者による作例)

³ ここでいう「文脈」とは、「発話を解釈するにあたって聞き手の使用可能な想定集合」(西川, 2010)を指す。

このように、「トイウカ」には音韻的変化を伴って新たな用法が生じているが、その用法には様々な制約が関係していると考えられる。このことは、文法化とポライトネスに関係があることを示唆している。すなわち、「というか」の文法化が進むにつれ、インフォーマルになっていくということである。これは、話し言葉における文法化の働きについて、非常に重要な問題であると考えられる。

5. 終わりに

本発表では、現代日本語における「トイウカ」について、文法化の側面からその機能について再考する。本発表では、「トイウカ」は、もともと「A トイウカ B」という構文であったものが変化し、その連続体として談話標識として用いられている例がでてきたと考える。そして、「トイウカ」の使用に共通する機能は「(何らかにに対する) 不足感の表出」であり、その不足感が何に対するものであるかによって、文脈の中で、最終的な用法が決定されると考える。即ち、「トイウカ」の用法は、「修復マーカー用法」と「談話標識用法」の二極間に段階性をもって存在し、その使用場面の前後文脈から最終的な用法が決まると考える。さらに、「トイウカ」の音韻的変化を伴う文法化から、その機能と使用に偏りと、ある種の制約があることを指摘し、話し言葉における文法化の働きについて、その使用場面から考察する。

参考文献

- 沖裕子(1999). 「質問 21 若い人が使う『ていうか』はどんな言葉ですか」『言語』, 28(5), 大修館書店.
- 田辺和子(2008). 「「というか」の文法化に伴う音韻的変化の一考察--縮約形「てか」「つか」をめぐって」『明海日本語』, (13), 55-63.
- 田辺和子(2013). 「「とゆーか」の意味と用法の変化について: 2002年・2008年・2013年の調査をもとに」『明海日本語』, (18), 129-157.
- 寺井妃呂美(2000). 「談話における『トイウカ』の機能」『日本と中国ことばの梯 佐伯圭三教授古稀記念論文集』, くろしお出版.
- 原田幸一(2015). 「若年層の日常会話における「トイウカ」の使用: 縮約形「てか・つか」に注目して」『日本語の研究』, 11(3), 16-31.
- 廣瀬浩三(2014). 「英語談話標識を再考する」『島根大学外国語教育センタージャーナル』, 9, 1-33.
- 吉澤文. (2003). 「ディスコース・マーカーとしての「ていうか」の機能の分析」, 『東京外語大 日本研究教育年報』, (7)
- 西川眞由美(2010). 「DM look の手続き的意味」『語用論研究』, (12), 1-18.
- 若松美記子&細田由利(2003). 「相互行為・文法・予測可能性「ていうか」の分析を例にして」『語用論研究』, (5), 31-43.
- Laury, R., & Okamoto, S. (2011). Teyuka and I mean as pragmatic parentheticals in Japanese and English. *Subordination in Conversation: A Cross-linguistic Perspective*. John Benjamins, Amsterdam, 209-238.
- Shinzato, R. (2017). Grammaticalization of PMs/DMs/MMs in Japanese. Fedriani, Chiara & Sansò, Andrea (a cura di). *Pragmatic Markers, Discourse Markers and Modal Particles. New perspectives*, Amsterdam/Philadelphia, 305-334.
- Shinzato, R. (2018). Layered Structure, Positional Shifts, and Grammaticalization. Yoko Hasegawa, (Ed.). *Handbook of Japanese Linguistics*, Cambridge University Press, 305-334.